
光

玉蔓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光

【Nコード】

N1131T

【作者名】

玉蔓

【あらすじ】

笑顔をなくしてしまった一人の少女。彼女に再び笑顔の花を咲かせることができるのは誰なのか。憧れの高校生活にたいして希望に胸を膨らませる新入生？勤続10年の清掃員？それとも・・・

桜

タイミングよく満開の時を迎えた桜は、まるでこれから立館高校に入学してくる人たちを祝福しているようだった。この場所で過ごす3年間で少年少女たちは様々なことを学んでいくのである。時に傷つき、悲しみ、怒り様々な経験を積んで大人への階段を上っていくのだ。そのペースは3年間で大人への階段を登りきる人もいれば、2、3段しか登れない人もいる。人によっては全く登れないどころか、階段を下りてしまう人もいる。だが、それでいいのだ。人が歩む道など千差万別、違って当たり前なのだ。昔、どこかの歌の歌詞に「3歩進んで2歩下がる」というのがあった気がするが、まさにその通りだと思う。清掃員の田口俊哉はそんなことを思いながら、毎年この時期の桜と新入生を眺める。彼はもともと商社で会社員として働いていたが、10年前55歳のときに会社を早期退職し、母校の立館高校で清掃員として働き始めた。

「おはようございまーす」

生徒たちの元気な挨拶が響く。この時期は1年生と上級生たちをはっきりと見分けることができる。これから始まる淡い青春の日々にたいする期待に胸をいっぱいにした1年生たちと、学園生活の現実に辟易しながらも毎日在必死にパスしている上級生たち、挨拶の仕方一つで明確に違う。

「はい、おはよう」

キリストが信者たちに微笑むのと同じくらいに、いや、それ以上に穏やかで優しい表情で田口は生徒たちと挨拶をかわした。

おや？

田口の瞳が一人の少女をとらえる。その少女の顔はやつれていて、昔の奥ゆかしさは微塵も感じられない。真っ白な校門をくぐるその顔は案の定、暗く沈んでいる。

やはり、まだ立ち直れないでいるか。仕方ない、あれからまだ半

年も経っていないのだからな。とりあえず学校に来てくれただけでもよしとせねばな。

「おはようございます」

その声は申し訳程度のボリュームで、自らの存在を少しでも小さく見せようとしているようだった。彼女は去年度の3学期は丸々学校に来なかった。世にいう不登校というやつだ。だが、友達や担任の先生の必死の説得によって、なんとか学校に来れるまでに回復した。そして本日、3年生の始業式に数ヶ月ぶりの登校となったわけだ。

田口の視界が2人の女子生徒をとらえる。彼女たちは少女のほうに駆けより、しきりに何か言葉をかけている。さしずめ「大丈夫?」とか、「みんな心配してたんだよ」とかだろう。だがそんな言葉が到底少女の心の闇を消せるとは思えない。むしろその言葉で彼女はますます落ち込んでしまうことだろう。だが、それでも彼女たちは少女を見捨てるべきではない。誰かとつながっているという感覚が無くなれば、少女はあつという間に、深い奈落に落ちてしまうだろう。

「おや、田口さん。おはようございます」

その声に振り向くと、上下のジャージに身を包んだThe 体育教師といった風体の男が、些かしつこいくらいの満面の笑みでこちらを見つめている。

「おはようございます、井上先生。今日も元気そうですね」

「そりゃ今日は始業式ですからね。我々教師も俄然気合いが入りますよ」

いつもより気合いが入るとなると今日はさらに生徒たちから煙たがられそうだな。

そんなことを心のそこでひっそりと思っていると、井上は校舎のほうに向かつていく先ほどの少女たちを見つけたようで、小走りで駆け寄っていく。

あらら、彼女たちも私と同じように朝からあのしつこい笑顔を見

せられる被害者か。

同情しながらも田口は校門前の掃き掃除にもどった。

桜？

ニユースキャスターは近畿地方の至るところで桜が満開を向かえていることを告げる。恩田悟志はカメラが映し出す桜の下を自分がこれからできる彼女と一緒に歩いている様子を想像しながら食パンをかじる。いつもよりほんの少し甘い気がした。隣では姉の曜子が見様によってはグロテスクにさえみえる量のイチゴジャムをつけた食パンにおいしそうにかじりついているところだ。

今の姉貴を見ているとそんなことは微塵も感じさせないが、彼女はほんの何週間前まで、ことあるごとにため息をつき、何かに悩んでいる様子だった。だが、くさつても唯一の兄弟であるぼくには分かる。今の姉貴は無理をしている、自分を強く保つために虚勢を張っている様子だ。

「ごちそうさまー もう、悟志何ちんたらしてんの。早く食べちゃいなさい、初日から遅刻する気？」

「姉貴は昔から、食うのが早すぎんだよ！俺のほうが普通なの」「分かったから、早く食べちゃいなさいよ。わたしは先言ってるからねー」

あいつ、もしかして一緒に登校する気だったのか！？「冗談じゃない！！そんなことすれば、初日からシスコンの異名をほしいままにしてしまう。俺の夢見る憧れの高校生活がパーになってしまうではないか。

「悟志ー 何ぶつぶつ言ってるの。お姉ちゃんもう行っちゃったわよ」

「分かってる。もう行くから」

母親にせかされながら、僕は家を飛び出した。憧れの高校生活に向けて。

さわやかな春の風を体いっぱい浴びながら、僕は小走りで学校まで徒歩10分の道に行く。学校に近づき、周りにも立館高校の制服がちらほら確認できるようになったころ、ふと見上げると、沿道には満開の桜たちが春風に踊っていた。それはまるで新たに入学してくる生徒たちを祝福してくれているようであった。その優美な姿に目を奪われていると、右隣から聞き覚えのある声が飛び込んでくる。

「よおーっす。今日も元気にしとるか」

「お前のほうは元気そうやな、ヤマ。」

「いやいや、それがそうでもないのよー 聞いてくれる？ そうか！ 聞いてくれるか！！ さっすがー悟志やわー やっぱ持つべきものは友達やな」

お前のそれが元気の基準を満たしてなければ、いったい誰がその基準を満たすというのかと呆れながら僕は答えた。

「いや、まだ聞くなんて一言たりとも言ってないけどな」

「それがさー 今度のリンちゃんのライブ、スタンド席しか取れなくてさー 本間、ファンクラブ会員の意味ないわ」

ヤマは僕のツッコミを華麗にスルーしながら、自分の話を続ける。
「知ってるかお前、会員費毎年5000円もかかるねんぞ！ 貧乏高校生の懐は寂しくなるいっばうや」

「当たり前やろ。リンかリンダか知らんが毎月毎月やれCDや、やれライブDVDや言うてたら金なんてすぐに無くなるに決まってるわ」

「あほか、そうやそうやった。お前にはリンちゃんの良さがわからない、かわいそうな人やったもんない」

「分かりたくもないわ。そんな金のかかるアイドル」

「ちやうちやう これは愛のあるお布施やねん。お前だつて神社にお参りしたとき、お賽銭入れるやろ？ あれと同じことやねんつて」

「もう知らんわ。神社仏閣の人ら全員から怒られてしまえばええねん」

そんな軽口を叩きながら、僕たちは僕らの前に堂々とそびえる、
大きな校門をくぐった。

桜？（後書き）

今作はさわやかな感じで行きたいですね。

桜？

校舎の前に行くと、先生たちがクラスの名簿を書いた紙を新入生たちに配布しているところだった。その姿を視界の隅にとらえながら、佐藤めぐみは自分の下駄箱に向かう。

あゝあ、私にもあんな時期があつたなー 　　そういえば。入学してもう1年か、ほんとなんでこんなに時が進むのは早いのだろう。まるで神様が私たちをせかすみたい。

そんなことを考えながらめぐみは自分の下駄箱からスリッパを取り出し、ローファーからそれに履き替える。そしてローファーを下駄箱にしまおうとしたとき、ふと下駄箱の奥に何か入っているのに気づいた。

またか。

心の奥でばやきながらも中に入っているものを取り出す。取り出してみると、案の定それは顔も知らぬ男子生徒からのラブレターだった。

「ご丁寧にお名前添えていただいても、誰のことかわかんないしなー 　　困惑しながら内容を見てみると、人目見たときから好きでした。付き合ってください的な内容のものだった。

「いやいや、顔も知らない人からの告白を「はい、そうですか」と受け入れられるほどに私は寛容じゃないんだけどなー

めぐみは2年生の中で1番と称されるほどの美人だ。鮮やかに染め上げた栗色の髪を肩までまっすぐに伸ばし、すっきりとした目鼻立ちでノーメイクでも一発でその美貌が分かるほどに洗練された美少女である。当然、そんな彼女に魅了される男子生徒は少なくなく、連日のようにアプローチを受ける。

かばんに見知らぬ恋する純情少年の恋文をしまい、階段を駆け上がる。彼女が通う立館高校には昔、奇妙な風習があり、それは成績の良いクラスが上の階層の教室を使うというものであった。今で

はそういう制度は差別の感情を生むというPTAからの訴えにより廃止されている。だが、その名残なのか圧倒的多数の生徒が上の階層の教室を望むという奇妙な伝統だけが残ってしまっている。ちなみに彼女の所属する6組は教室塔最上階の3階に位置しており、人によってはそれはとても嬉しいことであるらしい。めぐみにはその価値観が分からないが、ただ、屋上に近いということだけは嬉しい。彼女にとって屋上は学校一落ち着ける場所であるし、「あの人」を一度だけ見た場所であった。

それは去年の2学期の終わりの出来事だった。1年生だっためぐみはクラスの連中のレベルの低さに辟易し、一人で過ごすことがおこった。しかし、彼女がどれだけ孤独を望んでも、彼女の周りには人が溢れた。彼女の美貌に魅了され、少しでも近づき、あわよくば友達以上の関係になろうと目論む男子や、モテるめぐみの周りにいれば、自然と自分も男にありつけるのではないかと打算する女子、めぐみにとってその全てがけがらわしく見え、下等なことに思えた。だから彼女は1年生の教室塔から離れ、自分のことを知らないであろう2年生の教室塔に向かった。その屋上でめぐみは「あの人」を見たのだ。風に吹かれた黒髪を抑えようとせず、ただぼんやりと外を見つめる「あの人」。その姿は悲しみに包まれていた。だが、それはかえって彼女の魅力を引き立てる香辛料の役割を果たした。その姿を見ためぐみの目には突然、涙が浮かんだ。今、思い返してもなぜあの時、めぐみの目から涙が浮かんだのかはめぐみ自身にもわからない。「あの人」はそんなめぐみの気配に気づいたのか、こちらを振り返る。突然後ろで涙を流す娘を見て少し驚いた様子であったが、すぐに彼女はまるで聖女のように慈悲に満ちた微笑みでめぐみに笑いかけ、めぐみのほうに二、三步近づき、ゆっくりと彼女を抱きしめた。それはまるでこの世のすべての闇を包み込み浄化するようであった。あの日以来、めぐみの中にはいつも「あの人」が

いる。

2階から3階に上がる階段の途中にある踊り場まで駆け上がり、彼女はそこで止まり、一つ深呼吸をする。こうすることにより今日の一日をやり過ごす気合いを入れなければ、めぐみはあの教室で一日持つ自信がない。踊り場の窓から外を眺めると、遅刻ギリギリ生徒たちが遠くのほうからこちらに走ってくるのが見える。視線をずらし校門のほうを見ると桜の木の下で体育教師と清掃員が談笑しているのが見える。体育教師が何かを見つけ駆けだす。めぐみはその様子を自然と目で追う。その瞬間、彼女の心臓は激しく脈打ち、体中の血液が逆流していくような感覚を覚えた。間違えない、見間違えるはずがない。私はずっと「あの人」を思い続けていたのだから。体育教師と何か言葉を交わす「あの人」を見て、私はいつかのように涙をながした。

桜？（後書き）

ついつい心情描写をおおくしてしまいがちな今日この頃。

男子高校生？

「はい、みんなおはよう！！ 今日から1年間、みんなと一緒に1組を作っていくことになった井上優作です！ よろしく！！」

男が口からツバを飛ばしながら、教壇で最初の挨拶をしている。服装は上下を真っ赤に白のラインが入ったジャージといった、まるで「ごく〇ん」とかいう少し前のドラマに出てくる女教師の男版といった感じだ。クラスの全員が、彼の些か空回りしている演説を聞き、苦笑している。今の時代にはもはや絶滅危惧種である希望に満ち溢れた熱血教師、その姿に恩田悟志は哀愁すら感じる。

こういう人、見てて可哀そうだから、嫌いになれないんだよねー「ちなみに趣味は映画を見ることだ。なにかおすすめの映画があれば、先生に教えてくれよ！」

あゝこの人、学園ものの映画とかドラマ見て感化されたんだろな。今時の高校生はそんなに単純なものじゃないと思うぞ。

「よし、じゃあ先生、自己紹介したし、みんなにも自己紹介してもらおうかな。はい、じゃあ出席番号1番の人から」

淡々と自己紹介を続けていく生徒たちの声を聞きながら、悟志はクラスの女子たちを物色する。

なんか、いまいちだな。

整ったどこか西洋人を思わせる顔立ちと、抜群の運動神経、さらに頭もよい悟志は御多分にもれず、昔からモテにモテた。それゆえに、女子に対する評価は厳しく、並大抵の女子では見向きもしない。そうこうしているうちに自分の番が回ってきたようだ。悟志は立ち上がり、クラスメートたちの顔を軽く見まわし、話し出す。

「恩田悟志です。中学の時はバンドでギターをやっていました。現在バンドメンバー募集中です。楽器ができる人がいたら気軽に声かけてください！」

自分をよく見せる方法は少しは心得ているつもりだ。さわやかで

フレンドリーな男の子、これでクラスの高校生活の本分はイケメンの彼氏を作ること。そう勘違いして息巻いている女子が悟志の周りにやってくるだろう。そういう目先の些末なことに釣られる女子たちを退け、悟志の心をしっかりと見てくれる女の子をゆっくりと探せばよい。

1時間目は全員の自己紹介が終了したところで終了した。悟志がトイレに立とうとしたところにやかましい声を響かせながら、ヤマが突っ込んでくる。

「悟志くん、君は相変わらず、なんのおもしろみもないやつだね。あんなに自分を取り繕っちゃって」

「うるせえよ、お前なんて最初から最後までダダすべりだったじゃねえか」

「馬鹿野郎、男には負けるとわかってても、戦わねばならないときがあるのだよ」

「かっこつけやがって、何が趣味はコンビニのおりぎりを綺麗にあげるんだよ。あんなので誰が笑うんだよ」

「じゃあないわな、みんな緊張してて空気が硬かったからな」

「お前が硬くしたんだろが、ド頭にリンちゃんを愛する純情高校生の「山本 山」ですなんて言うから」

「あー俺の名前、変わってるもんな」

「そうやけど、今言ってるのはそこじゃねえよ、そこじゃ」

呆れかえった悟志は純情高校生が何かまだわめくのを放って、さっさとトイレに向かう。

女子高生？

視線を感じる。確認しなくても分かる。それはめぐみを見つめる男子生徒たちのいやらしい視線だ。だが、めぐみはそれに対し、特段感情を抱かない。もう、慣れてしまっているのだ、熱のこもった視線を送られることも下品な噂の標的にされることに。愛想を振りまくことも、笑顔を向けることもめぐみは決してしない。だが、それが男たちの心を揺らし、この生意気な女を自分のものになりたいという支配欲を刺激するのだ。定期入れをそつと開く。その中にはあの風が舞う屋上であの人を見た運命の日、あの人落とした1枚のプリクラが入っている。ひまわりのような笑顔で笑うあの人の隣には、見知らぬ男。めぐみはこの男を知っている、知っているはずだが、誰だか思い出せない。だが、誰であろうが関係ない。めぐみにとってこの男は憎むべき存在でしかないのだから。

こんな男があの人恋人！？　いいえ、そんなはずがないわ。そんなの私が認めない。

立館高校では2年生から本格的に理系と文系が分けられる。めぐみは文系で、東京の私立大学に通うことが一応の目的になっている。しかし、彼女は親の手前、そう言っているが、やりたいこともなければ、夢もない。かといって全国の大学生たちのように毎日毎日飲み会や合コンに追われる生活で無為に4年間を過ごしたいとも思わない。めぐみは何も持っていない。自分を支えるアイデンティティも何かをしたいという欲望も。そんな彼女にとって、あの人存在は衝撃だった。心の底から人のことをこんなにも知りたいと思つたことは生まれて初めてだったのである。名前・趣味・性格なんでもいい、なんでもいいからあの人を知りたい。あの人のことを思うだけで、胸の奥がぼわっと温かくなる。あの人のことを思うだ

けで、心拍が自分の存在を誇示するように激しく脈打つ。これはおそらく言葉にすると陳腐なものに聞こえてしまうが、恋なのである。しかも、ひとめぼれという一番たちの悪い性質の。

キーンコーンカーンコーン

チャイムが授業の終了を告げる。

何も新学期一発目からがつつり授業しなくてもいいだろうに。

そう思いながらさっさと帰り自宅を始めるめぐみのもとにクラスの数人の男女が寄ってくる。

「ねえ、佐藤さん。私たちこれから新しいクラスの親睦会がてらカラオケ行くねんけど、一緒に来おへん」

「ごめん、私これから用事あるから」
毅然と言い放ち教室を去る。その背中が数人の男子の言葉尻を捕らえる。

ほんと、お高くとまっちゃってよー

男子高校生？

教室に流れる気まずい沈黙、これは全国どこの高校だろうがよく見る光景だろう。だが、残念ながらたいくクラスに一人か二人はいるこの空気を打ち破ってやろうという奇特な輩はうちのクラスにはいないようだ。

「そんなに難しく考えなくてもいいんだ。ただ、クラスの代表としてみんなをまとめてくれるだけでいいんだ」

井上先生の声がむなしく教室に響き渡る。誰もがうつむき、沈黙を守る。集団主義国家に生きる日本人にとってこういう面倒な役回りは絶対に避けたいと思うのは至極当然なことであろう。

「それじゃあ、誰か、この人がいいとか、この人がそういう役割に向いていると思うって人はいるか？」

知り合ってまだ数日の間柄なのにそんなことが分かる人がいるはずがないだろう。

そう心の中で毒づいていると、一人の生徒が僕の背後で手を挙げるのを感じる。

「私、恩田君がいいと思います」

なるほど、確かにあいつなら要領もいいと思うし、向いているかもな・・・って、ええ！！？？ 僕！？

「河西さんがそう言っているが、どうだ恩田？ やってみる気はないか？」

みんなの視線が僕に集まる。その目は僕に頼むから受けてくれ。そうすれば、ことは丸く収まるんだということを暗に伝えているようだった。

「いいじゃん、悟志。お前、結構こういうの得意じゃん。中学の時、クラス委員やってたじゃん」

チェックメイト。

心の中にその言葉が浮かび、はじけた。ヤマの余計な発言によっ

て、僕の運命は決定づけられたようだ。

あの野郎、中学の時も、あいつの余計な発言によって僕がクラス委員になったのを忘れたのではあるまいな。いや、あいつのことだ、そんな記憶などリンちゃんとかいうアイドルの歌の歌詞を覚えることに脳の容量を取られ、とっくに記憶の彼方に飛ばされていることだろう。

僕は全てをあきらめ、クラスの委員長の役割を受けた。

「よし、それじゃ次は副委員長だな。誰か委員長をサポートしてくれるという人はいないか」

再び、後ろで手が拳がるのを感じる。すっかり忘れていたが、それは僕を委員長に仕立てたそもその元凶、河西智代のものであった。

「そうか、河西やってくれるか！ よし、みんな恩田と河西に拍手」
教室に拍手が響く。それは面倒な役割を押し付けられた僕に対する憐みな感情が込められていた気がしたのは、僕自身がひねくれものであるからだろうか。

女子高生？

教室を飛び出したためぐみは脱兎のごとく駆けだした。

今日こそ、今日こそは「あの人」にこれを渡す。

めぐみの手の中には、「あの人」と見知らぬ誰かのプリクラがある。めぐみはそれを拾ってから今日まで、大事に持ってきた。それはめぐみと「あの人」をつなぐ唯一の糸だった。

始業式にあの人を見てから、めぐみは幾度もこのプリクラを彼女に渡そうとした。しかし、決意し、いざ教室を出ると途端にめぐみは不安に襲われた。そう、彼女はおびえていたのだ。

穢れの知らない綺麗な「あの人」。彼女に対するめぐみのイメージが彼女との邂逅によって、もろくも崩れてしまうのではないか。

彼女はそれを恐れ、「あの人」から逃げていた。自分の心のよりどころである「あの人」が「あの人」ではなかったのならば。それを受け入れることがめぐみには到底無理に思えた。

ならば、いつそのこと自分の中に「あの人」をとどめ、接触する必要はないのではないか。彼女はこうも考えた。しかし、彼女は自らの好奇心や欲望を抑えることがかなわなかった。

下駄箱でローファーに履き替え、めぐみは校門に向かう。見上げた時計台の時刻は終礼の時間が終わってからまだ5分も経過していないことをしめしていた。学校を出る生徒はまだほとんどいない。

これなら見逃すことはないだろう。

そう確信したためぐみは校門のそばに腰を下ろし、心臓の鼓動を沈めようとした。だが、バカになった機械仕掛けのおもちやのように彼女の心臓は暴れ回っていた。

こんなに緊張したのは小学生のときの歌の発表会以来かもしれない。

めぐみは幼いころ、母親に歌のレッスンに通わされていた。彼女の母は若いころプロの歌手を目指していたが、大学生のころに喉を壊してしまい、その夢は断たれてしまった。だからその夢を娘に託したのだ。めぐみにとってほとほと迷惑な話だが、彼女自身歌は嫌いではないので、情性で続けている。だがプロを目指す気などさらさらない。趣味は趣味で留めておくから楽しいのであって、仕事にすると嫌いになってしまふ、それがめぐみなりの人生哲学だ。第一、歌手などそんじよそこらの小娘が簡単になれるものではないだろう。

ふと上を見上げると、大半が散ってしまった桜木が穏やかにそこにたたずんでいた。その姿を見てみると普段は心の奥にしまっている感情たちが自然と溢れてくるようであった。

彼女は無意識のうちに歌を口ずさんでいた。

OasisのDon't Look Back In Anger

。彼女はふとした時いつもこの曲を歌う。英語が得意なわけではないから歌詞の意味は全然分からない。だが、不思議とこの曲を聞くと自分の心が広がる気がする。音楽なんてのはそんなもんなんだろう。なぜだか分からないが、心を打つ。それだけでもう十分なのだ。

「ほおー なつかしいな。Oasisか、もう何年前になるのかな」
突然、聞こえてきた声にめぐみは驚き、恥ずかしくなった。見るとそこにはたまに学校内で見かける掃除のおじさんがこちらを穏やかな表情で眺めていた。普段、人に対して心を一切開かないめぐみもその無害な瞳には安心せずにはいられなかった。

「おじさん、この曲知ってるの？ お母さんがね、この曲好きで、台所で用事しているときとかいつも歌ってたんだ」

「知ってるも何も5年前、その桜の下で同じようにしてその曲を歌ってる子がいたんだよ。君もそうだが、あの子も本当に歌がうまか

った。そして何よりも歌を愛していた。でも結局、名前聞くのを忘れてたんだ。あの子ならプロでも通用すると思っただがな」

「へー 私と同じでその子も迷ってたのかな・・・」

「迷っていたようだったよ。彼女言ってたよ 何かに躓いたりしたらここで歌を歌う。そうすれば心の中の霧がスーッと晴れて、すっきりするんだって 君も何か迷っているようだね。私に余計なことは言えないが、その代わりと言っては何だが、君がさっき歌っていた曲の中で一番好きな歌詞の訳を送るよ」

だから、僕はベッドの中から革命を始めよう

「ふざけた子供のたわ言みたいな歌詞なんだけど、不思議と心を打つんだよね、僕も昔、この曲で一步前に進めた時があったよ」

「ありがとう、おじさん。なんだか元氣出た。お仕事頑張ってたね」
そう言い残し彼女は立ち上がり、再び校内に戻っていった。3年生の教室塔の入口に向かい、力強い足取りで。

男子高校生？

「なあ、なんで河西はいきなり僕を推薦したんやと思う？」

夕暮れに染まる街を徐々に暗闇が包み始める、そんなどこか所在なさげな時間に僕とヤマは2人、家路を歩んでいた。

「そんなん決まってるやんけ、河西はお前のことが・・・」

余計な事を言い出しそうなヤマの言葉を遮り、僕はすばやく言い返す。

「はいはい、お前のモチない中学生みたいな早とちりは分かったから、真面目に考えてくれ」

「いや、俺は案外本気で言ってるねんけどなー だってそうやる？ そうじゃなかったら普通その後すぐに、副委員長に立候補するかね」

それは確かに僕の頭にもよぎった。しかし、それはないだろう。

河西は今まで僕に対して全く興味がない様子だったし、僕もいつも静かな彼女を特段気にならなかった。

「それはあれやる。僕に委員長の役を押し付けたから、自分はその代わりに副委員長になったってだけやる」

「そうかなー 俺の考え方のほうが合点がいく説明やと思うねんけどなー」

「ないない、はい、もうこの話は終わりや」

「なんやねん、自分で言い出したくせによー まあ、ええわ。それじゃこの前のリンちゃんのライブについての話を聞いてもらおうか」

正直な所、全く興味がわかないが、今日は仕方ないから聞いてやろうと思う。

「あー あのスタンド席しか当たらんかったってやつ？」

「そうそう、けど聞いてくれ！！ リンちゃんがライブの最後に投げたサインボールが・・・」

「サインボールがどうした？」

「俺のところに来たんよ！ それで俺は必死こいて取るわな。けどな、俺の隣にいた家族連れの1番ちっさい女の子がよ、羨ましそうに俺のことを見つめるわけよ」

「それで、どうしたんや？」

「そらお前、そんな純粹無垢な瞳で見つめられたら、あげるしかないやろ」

「なるほど、んでお前はガチなほうのロリコンと・・・」

「なんですぐそういう結論に持っていくかな。それがこの話にはまだ続きがあつてやな。俺がボールをあげたのをなんとリンちゃんが見てたわけよ。せやからお礼が言いたいと言つて、マネージャーさんに頼んで俺を舞台裏に入れてくれんたんよ」

「それファンにとつては卒倒もんに嬉しいんとちゃうん？」

「当たり前やる！ あゝ あの時天国のようなひと時やったな。」

リンちゃんに名前聞かれたとき、テンパりすぎてめっちゃしどろもどろなつたわ」

「ふゝん でも、家族連れとかで見に来るってことは本間に人気やねんな」

「お前がテレビとか見なさすぎやねん。本間にすごいねんからな」

「そんなん言つんやつたら1回聞かせてくれよ」

「おういっぺん聞いてみ。絶対はまるから。今度CD持ってくるわ」

まあ、CD1枚くらい聞いてみてやるか。そう思い、僕は返事した。

「あんま期待してないけどな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1131t/>

光

2011年5月24日21時25分発行